

滋賀近江八幡水都八都

おうみはちまん
すいと はーと

一般社団法人 近江八幡観光物産協会
OMIHACHIMAN TOURISM ASSOCIATION

「水都」は水郷のまち、「八都」は近江八幡を指しており、これをスイートハート(恋人)とかけ「近江八幡は郷土の人にとっても観光客にとっても「恋人」のような素晴らしい街である」ということを表したものです

発行責任者:近江八幡観光物産協会 3000部発行 2002年 2月1日 初版 2007年 3月31日 三版
滋賀県近江八幡市為心町元9(白雲館内) TEL:0748-32-7003 2002年 6月9日 二版 2017年 3月31日 四版

No. 17



武佐宿本陣跡(現下川邸)

近江中山道 武佐宿



いっづく処 綿屋 旧おかし屋 綿屋さんを利用した休憩所として解放しています。



クスの大木 伊庭家の屋敷跡地にある



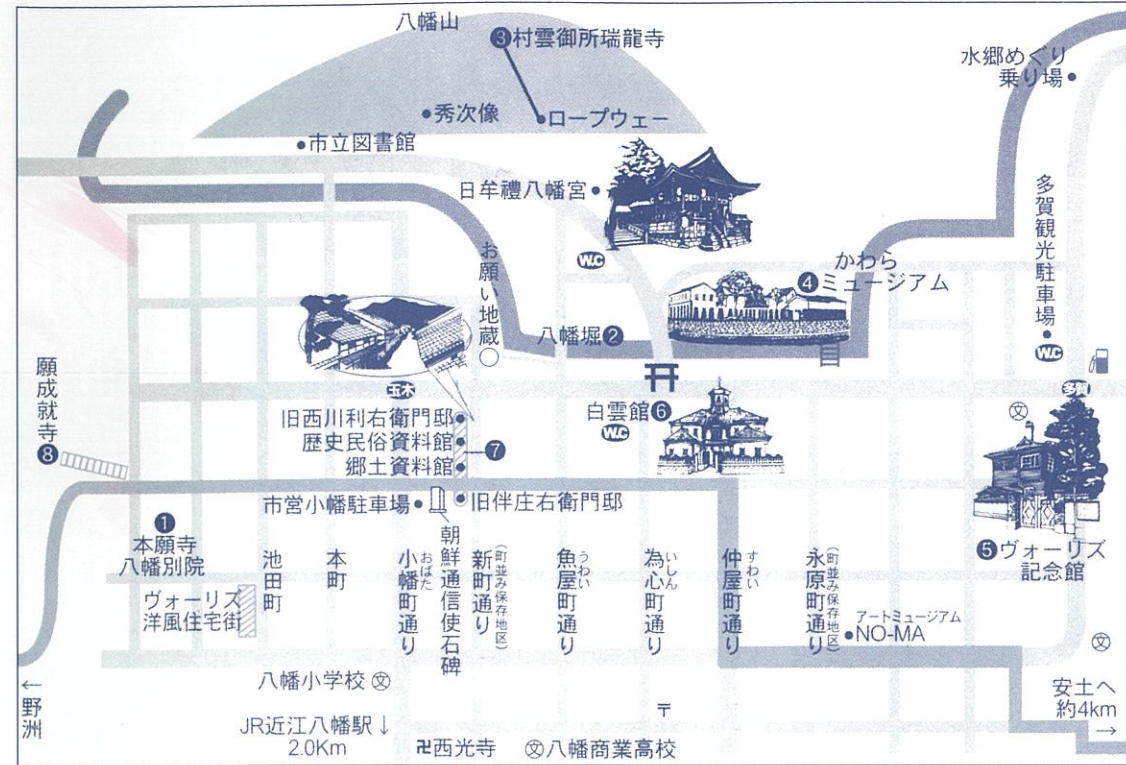
武佐宿



むしゃりんど

中山道は古代東山道を継ぐ道筋で江戸時代には五街道の一つに数えられていました。近江路には柏原から草津までの九つの宿場があり近江八幡市には武佐宿があります。この地は、武佐宿を起点に伊勢に向かう八風街道(八日市、永源寺を通り八風峠を越え伊勢へ)つながる街道で海産物、紙、布等の物資が行き交ったとされています。現在の国道四二一号線がほぼ踏襲)や八幡町内へ分岐する交通の要で長さは約一キロメートルに及びます。江戸時代に入つて宿次・伝馬の法が一新され、武佐宿駅は大駅となり、宿村大概帳によれば、宿高八百九十余石、町並八町二十四間、本陣一、脇本陣一、問屋二、高札二、旅籠二十三、人足五十人、馬五十頭(最も

賑わったときは百五十頭)、家数百八十三、人口五百三十七人と記されています。江戸時代の最も盛んな頃は三千人余の人の往来があり、近江商人もさかんに行き来したと思われまます。その当時の風景は、安藤広重によって木曾街道六十九次にも描かれています。また、かつては武佐升(近江升とも言われる八合升)や武佐墨(平安時代後期には紀伊国の藤代墨と並び名産だった)などの特産もあったと伝えられています。 ※中山道はかつて中仙道とも記されましたが、幕府は正徳六年(一七一六年)に中山道と改めました。



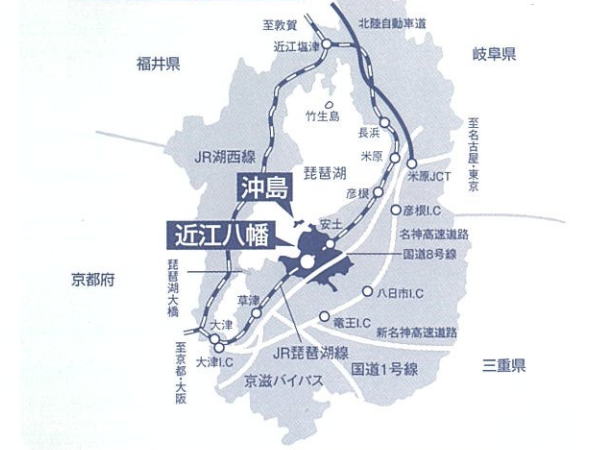
近江八幡 朝鮮人街道 マップ



- 1 本願寺八幡別院**
徳川家康上洛の際に宿泊した寺(この際に八幡の人達が、徳川家康に豊臣秀次時代からの無役無税の特権を続けてくれるように頼み、引き続きその特権を得た)の逸話が残っています。八幡商人は大坂の陣で家康を助けたことから、家康も八幡には特別な思いがあったと思われまます。また、通信使の宿泊所となった当寺には侍従官・李南岡の詞書が残されています。
- 2 八幡堀**
近江八幡のシンボル。時には時代劇の撮影に巡り会うことも...
- 3 村雲御所瑞龍寺**
秀次の菩提を弔うために京都に建てられたお寺を昭和三六六年に移築。日蓮宗唯一の門跡寺。
- 4 かわらミュージアム**
地場産業「八幡瓦」を展示紹介する博物館。瓦粘土を使つての体験工房があります(要予約)。
- 5 ヴォーリス記念館(要予約)**
メンタームで知られるヴォーリスの偉業を伝える記念館。
- 6 白雲館(入館無料)**
明治一〇年に完成した旧八幡東学校。現在は観光案内所、二階は市民ギャラリー。
- 7 近江八幡市立資料館**
近江八幡の歴史や文化、近江商人の生活と暮らしを伝える四つの資料館。新町通りは国の伝統的建造物群保存地区に選定されています。
- 8 願成就寺**
聖徳太子ゆかりの寺。
近江湖東名刹二十一番。



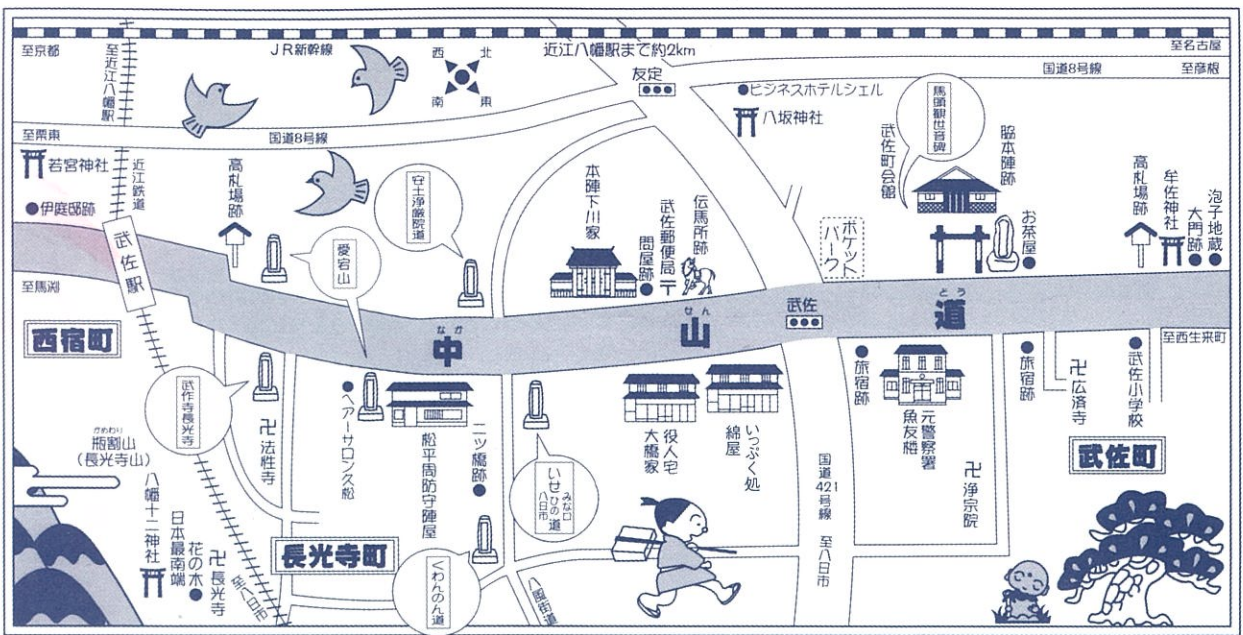
東京方面から		大阪方面から	
東京駅	約1時間55分	吹田I.C	約70分
東海道新幹線		吹田I.C	約70分
名古屋駅	約30分	京都市	約30分
東海道新幹線		京都市	約30分
米原駅	約20分	近江八幡	約20分
JR琵琶湖線		近江八幡	約20分
東海道本線		近江八幡	約20分
彦根I.C	約20分		
彦根I.C	約20分		
八日市I.C	約30分		
八日市I.C	約30分		
近江八幡			



観光・物産・ボランティアガイドのご案内は
近江八幡駅北口観光案内所 ☎0748-33-6061
安土駅観光案内所 ☎0748-46-4234

街道には、人や物が行き交うことでの商業発展という恩恵や人々の出会いや別れというドラマ等々、様々なものが今も昔も繰り返されています。それは、一見して分かるものではありませんが、街道をゆつくりと歩けば、お地蔵様や道標など当時の遺産が残されていることに気づきます。それらを通して当時の面影を忍ぶことも旅の良い思い出となるのではないのでしょうか。一歩一歩歩む大切さを思うとき、近江八幡市が歩むその道の先には何が待っているのだろうか、道に迷わぬための地図は持っているのだろうかと思ったりもします。焦ることはないが、確実にそして着実に進んでいくことが大切であるし、そのための道先案内人として観光物産協会がその役目を果たせるよう努力していきたいと思えます。(田中)

中山道武佐宿ガイド



高札

武佐宿の入り口である簡所にそれぞれ設けられていた（現在の武佐駅と牟佐神社付近）。高札場には約四メートルの櫓を掲げて民衆に読ませたとされ、その内容は、人夫の賃金、邪宗門の禁止、火付け者の取締り、生活の心得 等が厚いケヤキ板に書かれていました。なお現物は、牟佐神社、武佐小学校、広濟寺などに残されています。

泡子地蔵

通称「大根不洗の川」の岸辺に泡子地蔵遺跡の碑が立っています。この場所（西生来：にしゅうらい）の由来となった不思議な話が伝わっています。現地には説明版があります。

広濟寺

明治天皇の巡幸（明治十一年）の際に書院を行在所とされたとの記録が残っています。現在もその書院は残されており門前に記念碑が立っています。他にも伊達政宗公がここに滞留のときに植えたと言われる紅梅も現存します。

脇本陣跡（現武佐町会館）

本陣に次ぐ重要な宿泊及び休憩施設で本陣の補助的な役割を担いました。現在は当時の面影を思い起こす自治会館が建てられています。

馬頭観世音の碑

安政四年に武佐宿の伝馬の安全を祈って馬組中のもので建てました。昭和の初め頃まで武佐町の東人口付近にあり、後に浄宗院近くにあったが、現在は脇本陣跡に移されています。

魚友桜

明治期創業の老舗。建物の一部は登録文化財指定旧八幡警察武佐分署庁舎。

伝馬所跡（現武佐郵便局）

宿場の人馬の継立・荷物の運送、旅人の世話などの仕事を行い、人足五人と馬五頭を常駐させていたと伝えられています。現在は町並みに合わせた郵便局が建てられています。

大橋家

武佐宿の中では最も古い建物で四〇〇年以上前のものと言われ、油や米を商っていました。

伊庭貞剛

住友財閥を育て二〇〇年前に環境問題を考えた実業家
弘化四年（一八四七年）一月五日現在の近江八幡市西宿町に生まれ育ちました。二十二歳で司法官に任命され各地で活躍するも、官界に失望して十年で退職。故郷に帰る挨拶に叔父の広瀬幸平（住友初代総理事）の所にあった際に誘われ入社。当時住友は労使対立や別子銅山がかかえる公害問題でその対応に苦慮していましたが、粘り強い彼の努力により解決への糸口を見いだしました。特に公害問題では、巨費を投じて精錬所を新居浜の沖合二〇キロメートルの無人島に移転、また、鉱山の煙害で荒れ果てた山々には大規模な植林も行いました。これらの取り組みは、足尾銅山問題の解決に奔走した田中正造も絶賛し、当時の帝国議会で取り上げています。環境問題などと言う言葉すら無かった当時の状況からするとその意義は大きい。
後に第二代の総理事に就任した貞剛は、現在の「三井住友銀行、住友金属、住友電工、住友軽金属」等を設立し住友グループの基盤を築きます。また、明治二十三年には第一回帝国議会の衆議院議員として滋賀県から当選するなど、政治に経済に活躍しました。ただ、彼は「事業の進歩発達に最も害をするものは、青年の過失ではなくて、老人の跋扈である」との信念からわずか四年で総理事を退任し、五十八歳にして隠棲し、大正十五年（一九二六年）七十九歳にて永眠しました。



（住友史料館蔵）

本陣 下川家

本陣は皇族以下、將軍、大名 等の宿泊所や休憩所となった所。当時のもので残されているのは、土蔵と門のみで、邸宅は江戸期の火災に遭い消失したと言われています。（明治末期までは茅葺きの優雅な建物が残されていました。）

いづく処 綿屋

旧おかし屋綿屋さんを利用した休憩所として開放しています。

八風街道の道しるべ

文政四年（一八二一年）建立され「いせみなくちの八日市道」と記されています。

松平周防守陣屋

ここは川越藩松平家のとび地で、出張所の業務を果たしたとされています。後にこの松平家は大阪に移住されました。

武佐宿の会

近江八幡市武佐学区の活性化を目指し活動しています！
<http://musajyuku.net/>

朝鮮人街道

朝鮮から江戸へ 朝鮮通信使が通った日朝友好の道

先に述べた「中山道」とは別に琵琶湖岸に「朝鮮人街道」と呼ばれる街道があるのをご存知でしょうか。江戸時代には一般に鎖国の時代と思われていますが、朝鮮と琉球とは信を通わず外交のある国「通信の国」とし、中国とオランダとは貿易船の来航を認める「通商の国」と定めました。その朝鮮からの使節「朝鮮通信使」が通った道が「朝鮮人街道」と呼ばれ今もその名を残しています。

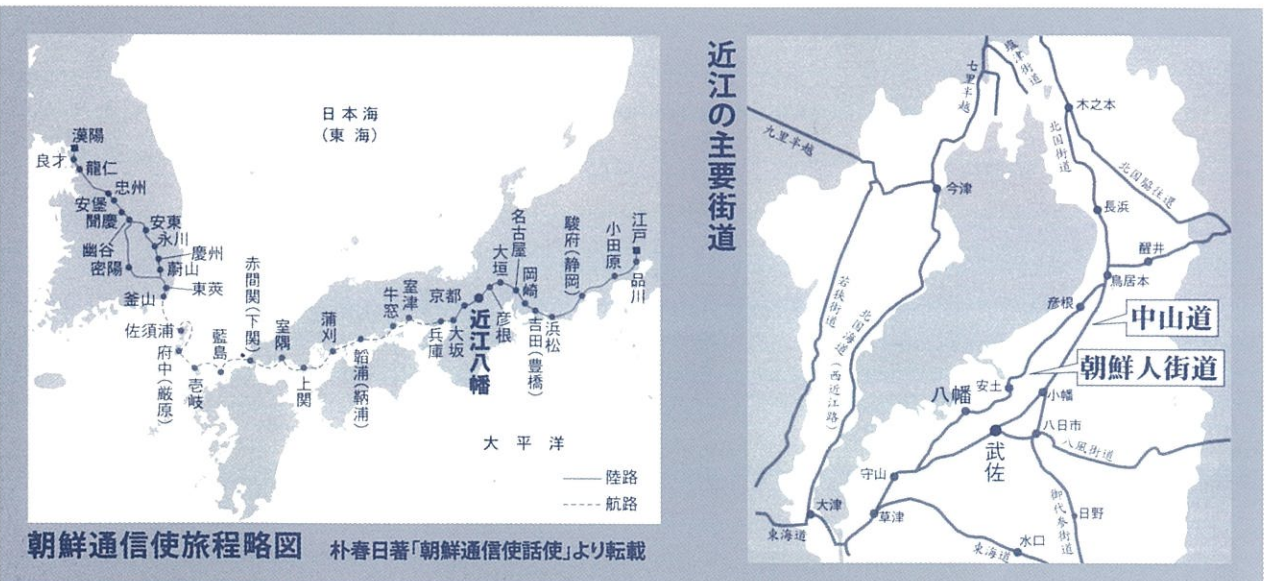
豊臣秀吉の朝鮮侵略以後、断絶が続いていた日朝関係の回復を願った徳川家康は、対馬藩を通じて朝鮮へ幾度と使者を送り、国交の回復に努めました。紆余曲折があったものの、慶長十二年（一六〇七年）、正式に使節を迎え入れることとなり、以後、文化八年（一八一一年）までの間、計十二回の通信使が日本にやってき

ました。当初の三回は回答兼刷還使（家康による国書の回答と日本に連行された捕虜を連れ帰る）でしたが、それ以降は將軍の代替わりに際しての祝賀へと変化していきま



本願寺八幡寺別院 朝鮮通信使の食事所として使われた

は文化使節的な面も持つており、学者や文人、画家や書道家たちも同行しており、少なからず当時の日本の文化に刺激を与えたと思われます。
通信使の一行はソウルを出発し、釜山より海路で対馬から瀬戸内海、淀川から京都へ到着、その後は陸路で中山道・東海道を通過し江戸を目指すという行程でその長さは約二千キロに及び、その期間は往復で約一年もの歳月を費やしました。しかしながらこの長い道のりの中で「朝鮮人街道」と呼ばれるのは、不思議ながら現在の野洲町小篠原から安土・八幡を経て彦根市鳥居本までの約四十キロに限られています。（滋賀県内での通信使の行程は基本的に京都を発ち、大津で食事、守山で宿泊、翌日は八幡で食事、彦根で宿泊という行程。）
朝鮮人街道の起りは織田信長が安土城築城の際に京都までの道を結んだことによります。中山道の「上街道」に対して「下街道」と呼ばれたり琵琶湖岸を走ることから「浜街道」とも呼ばれていました。一説には、日本の狭さを隠し広く見せるためわざと迂回し曲折した道を通させたと言われる説があります。しかしながら、大名行列との鉢合わせを避けたことや、時には五百名にも及ぶ人間の宿泊や休憩先を考えると彦根や八幡を通ることが最も適していたと考えられます。
また、関ヶ原の合戦で勝利を収めた「徳川家康」が上洛する際にこの街道を通ったことから、この縁起の良い吉道を通行させることで通信使への優遇ぶりを表そうとしたとも考えられています。



朝鮮通信使旅程略図 朴春日著「朝鮮通信使話」より転載